様式Ｃ－１９

# 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 10 月 29 日現在

機関番号：12102
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2009　～　2011
課題番号：21653050
研究課題名（和文）　被虐待児と親の再統合過程の評価と援助―精神生理指標とビデオによる行動分析の利用―
研究課題名（英文）　Assessment and intervention of parent-child relationship to prevent child abuse; using of autonomic nervous function evaluation and video
研究代表者　森田　展彰（MORITA NOBUAKI）
筑波大学・医学医療系・准教授
研究者番号：10251068

研究成果の概要（和文）：コミュニティサンプルにおける親の養育スキルとその関連要因との調査により、簡便な養育スキル尺度を作成し、その得点に対する要因を分析したところ、親の精神健康、相談者の不在、経済的問題、子どもの問題行動が関係していることが確かめられた。親子交流における児童の心拍変動の測定により、不適切な養育の行う親に対する児童の自律神経反応を評価できる可能性が示された。更に、親子場面のビデオによるフィードバックやロールプレイを用いた親教育に有用であることが示された。

研究成果の概要（英文）：The research of parenting skills and their psychosocial factors in community sample showed the mental health of parents ,economic states ,absence of adviser, and problematic behaviors of children have significant impacts on the parenting skills scores . I tried to assess the effects of maltreatment on children by autogenic nerve evaluation using heart rate variability, and found the method were useful. And ,I developed the psychoeducational program for abusive parents and confirmed the utility of video feedback. of the parent-child interaction in it.

交付決定額　（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| 2009 年度 | 1,100,000 | 0 | 1,100,000 |
| 2010 年度 | 800,000 | 0 | 800,000 |
| 2011 年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 総　計 | 2,700,000 | 240,000 | 2,940,000 |

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学
キーワード：児童・家庭・女性福祉

## １．研究開始当初の背景

虐待などの不適切な養育は児童にトラウマ症状を生じたり、その後のうつ病や問題行動の要因になることが指摘されている。その予防や回復のためには、親子関係の評価やそれに基づく介入が重要であるとされる。

## ２．研究の目的

親子関係および親子の精神的状態に関する評価法およびこれに基づく介入方法の作成が本研究の目的である。特に、親の養育スキルやこれに関連する心理社会的要因を明らかにすること、および親子交流の評価や介入について自律神経機能評価やビデオという新しい手法に関する有効性について重点をおいて取り組んだ。

## ３．研究の方法

### (1)親子関係と親子の心理状態およびこれに関わる要因の研究

本研究は、Ａ県の平成 21 年においてＢ村により行われた「子育てに関するアンケート」について、匿名化による個人情報の保護などの倫理的な配慮を行った上で、再分析を行った。同アンケートは、「次世代育成支援後期行動計画」の策定のために施行されたもので

ある。対象は、Ｂ村の未就学児童と小学校児童の保護者である。具体的には、住民基本台帳よりＢ村の未就学児童全員に調査票を郵送または、所属機関(保育所、幼稚園など)に配布し、回収については各子育て支援機関に回収箱を設置して回収した。就学児童の保護者については、Ｂ村内の小学校の全生徒を通じて、保護者に回答を求め、その記入したアンケートは封をしてもらい小学校で回収した。調査時期は、平成 21 年 9 月 11-30 日である。本研究で抽出した項目は以下の通り。

①基本属性、家族構成
②子どもの行動や発達状況の質問項目
③親子関係に関する質問項目
④K6 ：Kessler らが開発した気分・不安障害の自記式スクリーニング尺度であり、親の精神健康状態の指標として用いた
⑤子育てに関係する社会経済的な状態、社会資源に利用状況やニーズ等

これらの要因を分析した。

### (2)親子関係に関する自律神経機能による評価

心拍変動（Heart Rate Variability,HRV）による自律神経機能評価を用いて、親子の交流場面における心理状態を評価する手法の有用性について検討した。乳児院入所中の幼児 15 名と、一般家庭の児童（4-8 歳）と親子関係の問題で相談機関を用いていた臨床事例３名について、ストレス負荷前、中、後の 3 条件における児童の HRV の変化を検討した。なお HRV の測定には、HRV Live!(Biocom Technologies)を用いた。

### (3)親子関係への介入研究

児童相談所や精神科クリニックを用いる不適切な養育や養育困難を生じている事例に対して親子関係に対する介入プログラムとして以下の２つを行った。

① 親への教育グループ
② 親子関係へのコーチング

## ４．研究成果

### (1)親子関係と親子の心理状態およびこれに関わる要因の研究

未就学児童に対するアンケートは、配布数 599 で回収数は 261 で回収率は 43.6%であった。このうち、有効回答数は 259 であった。就学児童に対するアンケートは配布数 773、回収数は 427 であり、回収率は 55.2%であった。そのうち有効回答数は 415 であった。

#### ① 養育スキル尺度

養育に関するスキルに関する質問項目について肯定的回答、否定的回答、無回答の者の割合を調べた。望ましい養育の内容に関する質問に関して肯定的な回答が多くを占めていた。例えば、「子どもに対してよい関わりができている」という質問には未就学児童 83.4%、就学児童 82.7%が肯定しており、「子どものよいところをほめられる」では、未就学児童 91.9%、就学児童 87.5%、「子育てを楽しむ気持ちを持てている」では未就学児童 84.2%、就学児童 75.9%が肯定的な回答であった。

養育スキルに関する質問項目について因子分析を行った結果を表１に示した。主因子法で２因子を抽出し、プロマックス回転を行っていた。第１因子に負荷量が高い４項目は、肯定的な態度やスキルを表す５つの質問項目であったので「肯定的養育」と名付けた。第２因子に負荷量が高い項目は、養育に関する否定的な態度であったので「否定的養育」と名付けた。第１因子と第 2 因子のクロンバッハのαは、各々 0.855、0.608 であった。ある程度の内的一貫性を確認したので、各々の因子に関係する質問項目の得点の相加平均をとって、肯定的養育得点、否定的養育得点とした。

表１　養育スキル尺度

| | F1 | F2 |
|---|---|---|
| **F1：肯定的養育α=0.855** | | |
| 子どもが不安なときに安心させることができる | **0.772** | 0.13 |
| 子どものよいところをほめられる | **0.769** | 0.163 |
| 子どもに対してよい関わり方ができている | **0.678** | -0.068 |
| 子育てをたのしむ気持ちがもてる | **0.672** | -0.097 |
| 子どもに対して落ちついて対応できる | **0.509** | -0.201 |
| **F2：否定的養育α=0.608** | | |
| 子どもにいらいらして、しかりすぎてしまう | -0.062 | **0.775** |
| 子育てについて心配や負担感が強い | -0.06 | **0.481** |
| 子どもをたたいてしつけることがある | 0.106 | **0.480** |
| 子どもに過保護・過干渉になってしまう | 0.079 | **0.466** |

主因子法により、2因子を抽出した。プロマックス回転による

#### ② 子どもの行動と精神状態

就学前児童および就学後の子どもの行動と精神状態について調査して、未就学児童で気にしている親が多い行動は、良い友達ができること 66.8%、学校や幼稚園の勉強や活動の問題 59.8%、知能や成績の問題 59.0%であった。就学児童で、気にしている親が多い行動は、良い友達ができること 65.8%、よい生活習慣が身につくこと 55.2%であった。

親が気にしている児童の行動に関する質問項目について、因子分析を行った結果を表２に示した。主因子法で４因子を抽出し、プロマックス回転を行った。４つの因子は、第１因子に負荷量の高い項目は、成績や運動や外での活動への心配に関する

項目であり、「能力・活動問題」とした。第 2 因子に負荷量の高い項目はうそや落ち着きのない行動に関するもので「問題行動」とした。第 3 因子に負荷量の高い項目は子どもの友人関係に関する悩みで「交友問題」と名付けた。第 4 因子に負荷量の高い項目は、不眠や体調や食事についての問題であり「健康問題」と名付けた。4 つの因子に関係する質問項目のクロンバッハのαを計算すると、各々0.809、0.772、0.819、0.783 であった。内的一貫性を確認したので、各々の因子に関係する質問項目の得点の相加平均をとって、「能力・活動問題得点」「問題行動得点」「交友問題得点」「健康問題得点」とした。

表2　子どもの行動上の問題チェックリストに関する因子分析

| | F1 | F2 | F3 | F4 |
|---|---|---|---|---|
| **F1：能力・活動α=0.809** | | | | |
| 知能や成績 | **0.901** | 0.021 | -0.053 | -0.059 |
| 運動能力 | **0.797** | -0.047 | -0.001 | 0.034 |
| 学校や幼稚園の勉強や活動 | **0.650** | -0.022 | 0.127 | 0.045 |
| 外での遊びの不足 | **0.370** | 0.124 | 0.057 | 0.052 |
| **F2：問題行動α=0.772** | | | | |
| うそやルール破り | -0.016 | **0.821** | 0.044 | -0.08 |
| おちつきがないこと | 0.006 | **0.806** | -0.099 | 0.037 |
| 性の問題 | 0.001 | **0.448** | 0.035 | 0.018 |
| 発達の遅れ | 0.306 | **0.400** | -0.041 | -0.006 |
| うつや引きこもり | -0.049 | **0.348** | 0.272 | 0.151 |
| **F3：交友関係α=0.819** | | | | |
| いじめられていること | -0.025 | -0.078 | **0.965** | -0.01 |
| よい友達ができるか | 0.204 | -0.015 | **0.657** | -0.013 |
| いじめていること | -0.056 | 0.289 | **0.539** | -0.025 |
| **F4：健康問題α=0.783** | | | | |
| 不眠 | -0.017 | 0.028 | -0.086 | **0.817** |
| 体調 | -0.055 | -0.042 | 0.089 | **0.748** |
| 食事の摂取や栄養状態 | 0.158 | 0.015 | -0.021 | **0.612** |

主因子法により、4因子を得た。プロマックス回転を行った。

### ③ 親の精神健康状態

K6 の平均値は就学前児童の親の 5.0±4.7 であり、就学後の児童の親では 5.0±4.8 であった。一般人口の平均値は 3.5 ±3.8 に比べると、有意に高かった（Welch の方法を用いた。どちらの年齢層の親でも P<0.001）。不安障害や気分障害のスクリーニングのカットオフ点とされる 9 点を超えている者は、未就学児童の親の 251 名中 55 名（21.9%）、398 名中 81 名（20.4%）であった。

### ④ 養育ｽｷﾙ, 子どもの問題に関わる要因

養育行動と子どもの問題と親の精神健康の間の相関分析を行った結果を表に示した。否定的な養育と子どもの問題行動や精神健康の低さが中程度の有意な相関を持っていた（表３）。その他に、子どもの年齢が高いこと、相談相手がいないこと、経済的不安があること、が否定的養育の得点と関係していた。

表３　親の養育スキル・精神健康と子どもの問題の間の相関分析

| | 肯定的養育 | 否定的養育 | 児童の能力的問題 | 児童の行動的問題 | 児童の対人的問題 | 児童の身体的な問題 | 親の精神健康（K6得 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 肯定的養育 | 1.000 | -.462** | -.115* | -.325** | -.218** | -.088 | -.444** |
| 否定的養育 | -.462** | 1.000 | .269** | .439** | .324** | .215** | .369** |
| 親の精神健康（K6得点） | -.444** | .369** | .150** | .222** | .150** | .127* | 1.000 |
| 児童の行動的問題 | -.325** | .439** | .544** | 1.000 | .555** | .480** | .222** |
| 児童の対人的問題 | -.218** | .324** | .536** | .555** | 1.000 | .401** | .150** |
| 児童の身体的問題 | -.088 | .215** | .518** | .480** | .401** | 1.000 | .127* |
| 児童の身体的問題 | -.151* | .212** | .489** | .439** | .355** | 1.000 | .253** |
| Spearmanの順序相関係数 | | | | | | | |

養育や子どもの問題に関わる要因に関する共分散構造分析を施行した結果を図１に示した（AMOS17.0 による）。図１中の、養育スキル得点とは、否定的養育得点を逆転項目として加算点を出し、これを肯定的養育得点を足したものである。経済的要因などの背景要因が子育て援助環境を規定して、これが親の精神健康に関わり、さら

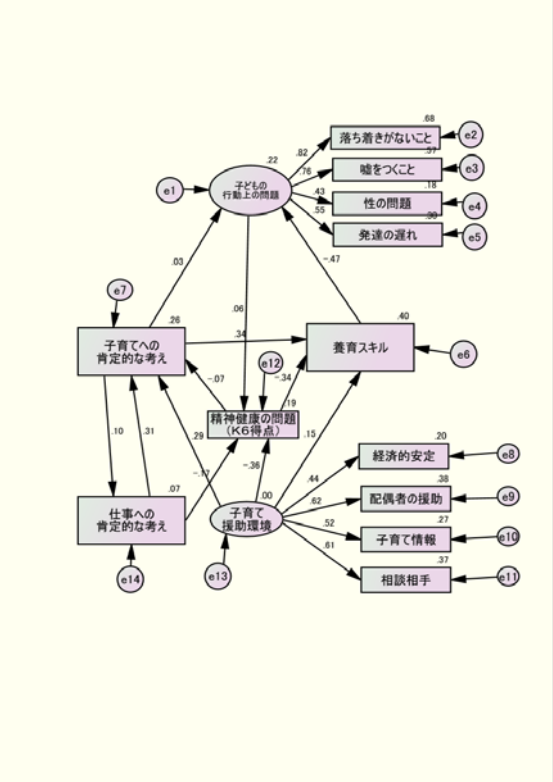


図１　共分散構造分析の結果

にそれが養育スキルを介して、子どもの問題に影響を与えていた。このモデルに関するGFIは、0.971であり、AGFIは0.951であり、RMSEAは0.049であり、モデルとしての適合度は十分あると判断された。

**(2)親子関係における自律神経機能評価**

一般家庭における親子と、親子関係の問題があって、相談機関にかかっている事例の群で、3つの条件における自立神経機能の推移を比べた結果以下のようの所見を得た。

・副交感神経機能の指標とされるHF%の結果を図2と図3に示した。一般家庭の児童では、親と同席して遊んでいる時と比べて、親が離れているときには、これが低下して、親が戻ってくると上昇するというパターンを示す者が多かった。一方、臨床の児童事例については、3例中2例において、親と分離している最中の方が、逆にHF%が上昇するパターンをとっていることが見いだされた。

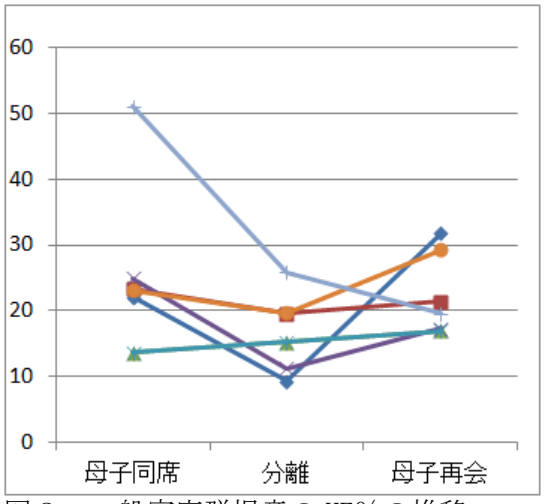


図2　一般家庭群児童のHF%の推移

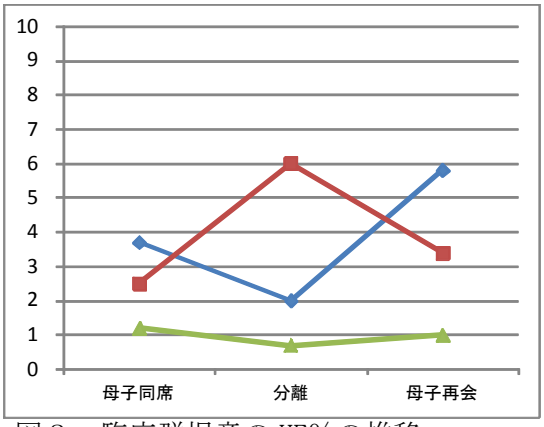


図3　臨床群児童のHF%の推移.

・交感神経機能の指標とされるLF/HFは、一般家庭群では、分離時に上昇する傾向が認められた(図4)が、臨床群では、分離時に低下するパターンが3例中2例に認められた(図5)。

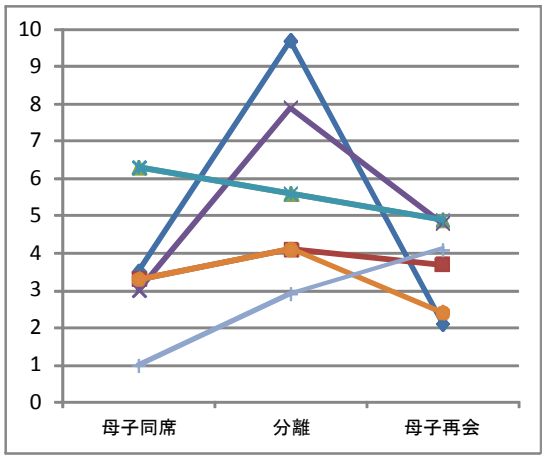


図4　一般家庭群児童のLF/HFの推移

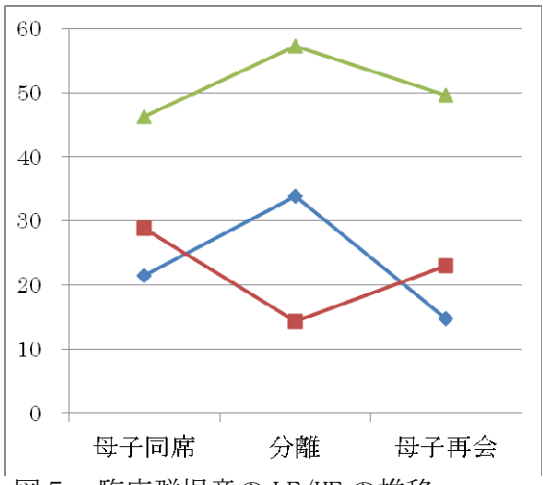


図5　臨床群児童のLF/HFの推移

親が本来的には、子どもの安心の基地になると考えられており、親との接する場合にリラックスするすなわち交感神経（LF/HF）の低下、副交感神経(HF)の上昇がみられるはずであり、一般家庭群は多くのそうした傾向が見られることが確かめられた。一方臨床群では、それとは逆に親といると場合にかえって緊張するパターンが3例中2例に認められた。このことから、心拍変動（HRV）を用いて、親子関係を評価できる可能性がある程度示されたといえる。しかし、臨床群でも本来的なパターンを示す場合もあり、今後より詳細な親子関係のパターンと自律神経機能評価の間の関係を調べる必要がある。

(3)親子関係への介入研究

① 親への教育グループ

不適切な養育やＤＶの傾向をもつ父親が、よい父親になることを助けるグループプログラム“ナイス”を作成して施行した。これはカナダオンタリオ州で作られたCaring Dad というプログラムをもとにしたものである。全７回の心理教育プログラムで、その内容は、以下の通りである

| |
|---|
| 1回：子どもにとっての父親や家族の意味を見直し、父親としての目標を考える<br>2回：子ども中心の養育と親中心の養育<br>3回：自分の子どもとよい関係を作る方法<br>4回：子どもと大人の違いを考える<br>5回：不適切で、子どもにダメージを与える養育を認識する<br>6回：子どもの母親との関係、家族全体の関係について考える<br>７回：困難な状況における問題解決、不適切な方法を防止する<br>８回：子どもとの信頼関係を築きなおすこと |

平成 21 年-23 年の間に６クールを施行して、18 人の父親が参加した。継続的に参加した６例については、子どもの視点に立てるようになり、子どもとの信頼関係を取り戻せるようになるなどの成果をあげられた事例が多かった。親子場面のビデオを用いてそこに映る子どもの気持ちを読み取らせるワークや、ロールプレイで子どもの役をやるなどのワークは、子どもの気持ちへの気づきにつながることが多かった。

② 親子関係へのコーチング

上記の親のグループプログラムとは別に、子どもと親のペアに対して実際に交流をさせ、その関わり方についてコーチを行うプログラムも行った。これは、主に米国のCARE(Children Adult Relationship Program)というプログラムをもとにした内容を行った。このプログラムでは、実際に親が子どもとの遊びの場面で行う「くりかえす」「子どもの行動を言葉にする」「具体的な賞賛」というスキルを行わせる。CAREと元のやり方では親との訓練が中心であるが、親子場面でこれを行わせ、ビデオで録画して、これを後で親にもみせて、やれていたスキルを確認させるなどフイードバックを行った。ビデオを用いて自分のスキルを自己分析させる方法は動機付けや自分を客観視するなどの効果をもつことが確認できた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

① N.Morita、S. Nakajima、M.Kazui、T.Endo、M.Goto：Development of child-care workers’ report checklist of post-traumatic symptoms related to child abuse in preschool children, Acta Criminologiae et Medicinae Legalis Japonica Vol.78(4): 104-106,2012.（査読有り）

② 森田展彰，数井みゆき，金丸隆太,中島聡美：不適切な養育が幼児の自律神経機能に与える影響の心拍変動による評価－乳児院入所児童を対象とした試み－子どもの虐待とネグレクト、 第 13 巻 3 号、409-420、2011.（査読有り）

③ N.Morita:Psychoeducational Approach for Domestic Violence Batterers and Abused Women and Children, The Book of bstracts;16th World Congress of the International Society for Criminology ,307－308,2011.（査読なし）

〔学会発表〕（計５件）

① 森田展彰：被害体験をもつ親の心理の理解と援助；アディクションや暴力問題をもつ親に対する援助と介入、シンポジウム被害体験を持つ親への介入と支援ー虐待の連鎖を止められるかー、福岡県クローバープラザ 2012.6.9.

② 森田展彰：子ども虐待とDVによる子どもの心理的問題とその対応、日本子ども虐待防止学会第１６回学術集会　熊本県立劇場、2010.11.27. 9.

③ N. Morita：Psychoeducational approaches for domestic violence cases; batterer intervention and rebuilding of family relationship、ISFL(the International Society of Family Law) Regional Conference in Japan; Reconstitution of Modern Families - Recent Developments in Asian Family Law, University of Tsukuba ,November 7, 2010.

〔図書〕（計３件）

① 森田展彰:パーソナリティ障害および暴力、アルコール・薬物の問題, 奥山真紀子、西澤　哲、森田展彰編著：虐待を受けた子どものケア・治療、診断と治療社、東京、pp134-150,pp151-164,2012.

② 森田展彰、信田さよ子、 高橋郁絵、 荻田　博深：プログラム理解のためのエクササイズ、被害者支援の一環としてのDV加害者更正プログラム、(リスペクトフルリレーションシップ研究会編)、能登出版、東京、pp.43-369、2010.

③ 森田展彰：DVを行う父親に対する働きか

け、DV加害者がよき父になるために（リスペクトフルリレーションシップ研究会編）、能登出版、30-38 頁、2009

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）取得状況（計 0 件）

〔その他〕
ホームページ等
http://www.hcs.tsukuba.ac.jp/07_shakai.html

６．研究組織
(1)研究代表者
**森田　展彰（MORITA NOBUAKI）**
**筑波大学・医学医療系・准教授**
研究者番号：10251068